
クリスマスの夜の1ヶ月前の奇跡

福田 伶詩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスの夜の1ヶ月前の奇跡

【Nコード】

N5915D

【作者名】

福田 伶詩

【あらすじ】

クリスマスは基本的に信じない。そんな3人が出会ったら…

Artistガクと発明家Yasudaと大ドロボウ黒子

僕にはクリスマスはない。僕がサンタを信じていないからだ。信じていないのも、クリスマスが無くてプレゼントが無かったからだから、信じようが無い上に悪循環だ。

代わりに僕は歌を歌う。ギターも弾く。絵だって描く。今まで生きてきた分のクリスマスの楽しみを、1ヶ月半たっぷり使って僕の人生に払ってもらわなきゃ。

私にはクリスマスはない。というか、クリスマスで浮かれているヒマなんかないのだ。世紀の大発明でもない限り、喜びを感じない。そんな人間もいるのだ。ここに。

最近不思議なものを母が買ってきた。「present for Christmas」というもので、クリスマスに何が欲しいのか手をかざすと分かるスグレモノ……と、書いてある。この国の技術は進んだ。しかし、私やそれよりも年下の世代も、何か大切なことを失ってしまったている。そう思った。

俺にはクリスマスなんてない。年中無休で仕事をしているし、クリスマスは子供の頃からない。“プレゼントなんか親が、俺が寝ている間に置いているのだ”そう思い始めたのは5才くらい。早すぎだよな。親とは言っても、俺は孤児。施設の先生が親だった。だけど、寂しいとかはない。俺には感情が欠落しているのだ。

その代わり、歪んだ欲望がある。人の幸せが憎い。奪い取りたくなる。そんな気持ちだが、今の仕事に繋がっているのかも知れないな。

こんな3人が、11月25日のクリスマスの夜の1ヶ月前に出会ったら……

世界は、変わるかも知れない。

Yasudaと黒子

11. 8

黒子はこの日も仕事に向かった。今月の初仕事、絶対に外す訳には
いかない。

大ドロボウである黒子は、この家を今月に入ってからの一週間を使
つてくまなく調べた。裏口の警備が薄いし、男児がいるが、中学生。
反抗期であろうこのくらいの年齢の奴らは、おしなべて部屋にこも
る習性を持っている。この館の主は、発明家であり、科学者。夫も
科学者だったが、すでに他界している。

この世界で科学者や発明家がドロボウに入られたなら、そりや相当
屈辱だ。自分の家を守る物すら発明できない科学者として、基本的
に世間の信用を失う。

それに、プライドの高いこの館の主だ。警察には言わないだろう。
この、「キュラー・ヤスダ」婦人は。それに、黒子はこの1週間で
この屋敷の間取りを全て覚えてきた。もちろん勝算はあった。完璧
だと思っていた。少なくともこれまでの黒子は。

裏口からこっそりと入っていった。確実にバレていない。そう思
ったときだった。

「誰ですか。」

後ろから、乾いた声がした。とっさに振り向くと、中学生くらいの

男子がいた。逃げようと

したが、窓は自動的に下ろされ、行く手は阻まれた。黒子は尋ねた。

「なんで分かった？」

すると呆れた顔をして、こう答えた。

「ヤスダ家は発明家の家。もちろん私も例外じゃありません。
私の発明品を試すのにあなたみたいなコソドロはちよいどいいんで
すよ。」

1週間前から家をマークしていたのはあなたですよ？」

いい終えてから、気が付いたように言った。

「なんだ、まだ子供じゃないですか。」

「お前だってガキじゃねえか。何歳だよ？」

「今年15になりました。あなたはもうなんですか？」

「俺は…18だよ。」

どちらもガキとは呼べない事に気づき、二人は笑い出した。はっと、
Yasudaは笑いを止めた。

「親御さんはいるんですか？」

「…あんたには関係ねーだろ。」

「じゃあ、いいです。無理に聞こうなんて思ってませんから。」

「あ、そう。」

黒子は気が抜けた。自分の周りは色々しつこく聞いてくる人達ばかりなのに。

Yasudaはメガネの位置を直してこう言った。

「なんだか気が合いそうですね。名前を教えてくださいますか？」

どの辺でそう思ったのかよく分からなかった黒子は、平素の顔に戻るのに少し時間がかかった。

「ヤスダ家で雇いたいんです。そうだな：私の研究品の実験台なんていかがですか？」

冷暖房完備の寮付き、月給30万。どうですか？」

30万。その、ドロボウ業で1ヶ月必死に働いても手の届かない金額に、黒子は目を輝かせた。

「その話、乗った。俺は黒子。今から俺はあんたの実験台だ。」

「じゃあ、明日から寮に入れるようにしておきます。研究に付き合ってください。」

「了解。じゃあ。」

「あ、今後は窓から入らないようにお願いします。それと、敬語は要りませんよ。」

「分かってるって。Y a s u d a。」

一人ぼっちだった自分に、小さな光が灯った。

Yasudaと黒子とおしるこ

11. 10

実験台の仕事は比較的楽だった。

発明品が出来るまでは、Yasudaとずっと喋っていたればいいし、もはや黒子の仕事は喋り相手だった。それでも黒子は構わなかった。実験台なんて、どんな事をさせられるか分かったもんじゃない、というそれよりも、話の合うYasudaとずっと喋っていたかった。

「そうだ、これ。私の発明品じゃないんですけど、ちょっと試してください。」

そういいながら胡散臭い機械を差し出した。

「俺が？」

「あなた以外に実験台はいませんよ。」

はいはい、と黒子は気のない返事をし、機械の取説を読んだ。

「お前、これ“Present for Christmas”って。

クリスマス、信じてねえの？」

Yasudaは頷いて、昔からです、と加えた。

「そっか、俺も一緒。小さい頃から信じれねえの」

そう言って黒子はおとなしく取説をまた読み始めた。Yasuda

はまた研究に没頭しました。

「これ、やるぞ。見ろよお前、やる意味ないじゃん。」

「今見に行きます。」

そう言って、Yasudaは黒子の場所に行った。そしてPresent for Christmas“クリスマス機”に目をやった。

『ポウッ…』と音がして、クリスマス機のレンズ部分は光った。そしてキラッと光り、なぜかおしるこが映った。

「おしるこ…?」

「だって俺今おしるこ食べたいんだもん。」

「…すごいですね。この機械。」

「突っ込めよ!!」

「今後の研究材料です。」

「無視ですか。」

「はい。笑」

こんなコントみたいな二人は黒子の要望によっておしるこの材料を買いに行った。

「おしるこってどう作るんだっけ?」

「帰ったらうちのシェフに聞きましょう。」

「計画性ねえなー。」と言う黒子の言葉をスルーしてYasudaは言った。

「実は最近研究ばかりしていて。外に出るのも久しぶりです。」

Yasudaは苦笑しながら言った。

へえ、と黒子は感心したような顔をした。腕にクリスマス機を抱えている。

「それって超ー不健康じゃん。」

Yasudaとガク

肌寒い11月中盤。ガクは公園で絵を描いていた。

横にギターを置いておいて、あとで弾く予定だ。

ガクの描く絵は水彩、油絵、版画の他にも色々あるが、彼が特に気に入っていたのは鉛筆だけで書きただのグロッキーだった。白と黒だけで物を表現する事が、彼は好きだった。

下手に色を着けて自分の色を押し付けるより、見る人の想像にお任せする。そんな感じがすることも好きだった。

そんな時、ある二人に出会った。コントみたいに話しながら、騒ぎながら、歩いていた男の子と言うには大人すぎる、少年2人。片方は奇妙な胡散臭い機械を腕に持っていた。

「描きたい」

若干10歳の男の子には普通ありえない欲求だった。しかしガクには、立派にその大人の画家でもたまには感じないままの欲求が込みあがった。すぐさまスケッチブックと鉛筆を手に、さっと描き始めた。3分もしないうちにシルエットを描きあげた。

「出来た…」

シルエットだけだとガクの絵は他の人には何を描いてあるかすら分からない。しかガクにはその時の情景までも、手に取るようにわかるのだ。

あとは帰ってから描こう、と思ったときだった。

「ぼーず、何描いてんの？」

「きゃばんっ!!」

後ろから声がして、びっくりして変な声を出してしまった。

そこにいたのは、さっきの胡散臭い機械を抱えた男と、メガネの陰気そうな男だった。

「お、絵か。うわ、何これ。まじへったクソだなーお前。」

「この子の絵は上手いですよ、黒子。君、バブロ・ビカソって画家知ってますか？」

「知らないけど、何？」

不信任を抱いているガクの態度に、Yasudaは苦笑して言った。

「君の絵はその画家のスケッチに似ています。今に売れますよ。」

「ありがとう…」

ほんの少しだけ笑ったガクを見て、Yasudaは安心した。そこに、黒子が声を上げた。

「他の絵見てみ、超——うめえ。天才的だし。」

他の絵——油絵や、水彩画だ。一つひとつ違う人が描いたみたいだ、と黒子は呟いた。

「お前、すげえな。なまえは？」

「…ガク。」

「そっか、ガクか。俺は黒子。あっちはY a s u d a。もしよければ、こいつの屋敷来ないか？
冷えるだろ、ここ。いいよな、Y a s u d a？」

「別に構いませんよ。」

知らない人には名前を教えたり、付いて行ったりしちやいけないけど、僕はこの人達を信用できる。邪険にしたりしないんだ。そう思うと、ガクは自然に頷いていた。

Yasuda家にて

11. 10

暖かい家だ。屋敷に入った瞬間、ガクは思った。

本当は何者なんだろう、この人達。そうも思ったが、それを憶測することはやめておいた。

屋敷に招待してくれた人を怪しむのは失礼だと感じたからだだった。

「おしるこ食べられますか？」

Yasudaはガクに問うた。ガクは頷いた。

Yasudaは良かった、と呟いて、しばらくソファに座っていてください、と言った。それにもガクは頷いた。

キッチンにて、黒子とYasudaは、今さっきシェフにざっと作り方を教わっただけなのにも関わらず、手際よくおしるこを作っていた。

「なんで、ガクのこと屋敷につれて帰ったんだよ？」

黒子はYasudaに聞いた。普段のYasudaなら、子供なんか放つときでしょう、と言うはずだった。

それはYasudaが、敬語を使っているという事実から考えられる性格とははるかに遠く、子供が嫌いで、面倒くさがりで、俺様主義で、自分勝手だからだ。しかも黒子がたった2日間に分かるほどの。

「なんで、って言われても…私はただ自分の意思に正直に動いただ

けですから。

それにしても：エプロンの似合わない人っているもんですね。」

確かに、ピアスを両耳にしている髪型はパンキッシュなショートウルフで前髪はハードアシメ、髪色も明るい男にエプロンは似合っていないかった。

「お前はすげえ似合ってるよ。」

確かに黒子の言うとおり、タイトにセットしてある黒髪にメガネのいかにもマジメな男にエプロンは似合っていた。

「ちょっと、メガネ取ってみろよ。」

そういつて、黒子は、嫌がるYasudaのメガネをほとんど強引に取った。すると：

「や、お前きれいな顔してたんだな…」

Yasudaの顔は、きれいな女みたいだった。しかし男らしい鼻や口や輪郭をしている。案外体も筋肉質だったことにも黒子は気が付いた。

「お前なんで今までモテなかったんだろーな。」

「モテてないとは言ってます。何も見えないんで返してもらえますか？」

「あ、ごめん。でもメガネしてるの勿体ないよお前。」

知ったこっちゃないです、と言って、3人分のお椀におしるこをよそった。焼いた餅も入れて、完成。

「じゃあこれ、ガクのところに持って行って。私は後片付けやっときます。」

「早く来ねえと食っちゃうよ。」

「食ったら殺しますよ。（笑）早く行ってください。」

はいはい、と上機嫌なままに黒子はガクのところへおしるこを持って行った。

洗い物をしながらYasudaは考えていた。

「何で連れてきたか、ですか…。」

Yasudaはあの日のことを思い出していた。兄さんの顔、もう思い出せない。

兄がいなくなったのはクリスマスだった。雪が激しく降っていた。

ガクの絵

11. 10

おしるこを食べ終わった頃。

「で、絵は描かないの？」

黒子がガクに訊くと、

「いい。」

とガクは答えた。Yasudaが、こう言った。

「家は汚しても大丈夫、どこで描いても構いませんよ。」

すると、ガクはニッコリと微笑んで、「いいの？」と訊いた。

「どこでも、好きなところで。」

そうYasudaが答えると、ガクは一目散に駆けていった。さつきから、いいポジションを見つけていたみたいだ。

「なんでガクが考えてることが分かったの？」

黒子が訊くと、Yasudaはこう答えた。

「なんででしょうか、あの子はそういう回りに気を使うタイプの子な気がしたんです。」

「ふうん。」

自分で聞いたくせにあんまり興味なさそうな顔をして、黒子はガクの元に走っていった。

「何書いてんの？」

「…絵。」

「そりゃそうだけど。」

「鉛筆で下描き。」

「ふうん。」

それから会話はなかった。ただ、鉛筆は紙の上を滑っていった。途中で、後片付けを終えたYasudaがガクの絵を見に入ってきたが、彼もまた雰囲気を感じ黙っていた。

「…できた。」

声を発すると、ガクはバケツを黒子に差し出した。「俺かよ」と嫌そうな表情を出したものの、素直に水を汲みに行った。その間、ガクは絵の具の準備をした。古そうな、小さな絵の具。

「よければ新しいの、差し上げますよ？」

Yasudaの親切な好意をガクは首を横に振って断った。

「こっちのほうが、色がいい。でもありがとう。」

と言って。

黒子はバケツとともに帰ってきた。すると、ガクは小さな声で

「ありがとう」

こう言った。そしてバケツの水にこれまた古ぼけた筆をつけ、パレットに置いた色と混ぜた。

そしてただ、黙々と色を着けていた。もう、屋敷の中には夕日が射していた。

「かんせい。」

そう言って、二人にキャンバスを見せた。

そこには、今まで見たこともないくらいに稚拙で、巧妙で、それでいて美しい絵があった。

それは3人をあまりに感動させた。

ガクと黒子

11. 10

Yasudaはガクの施設に電話をしていた。

その間、黒子はガクと一緒にいなければならなかった。ガクは黒子に懐いていなかった。

「おい、ガク。ず————つと絵エ描くの？」

ガクは返事として首を縦に振った。

「不健康なガキ…あ、ちょっと待ってろ、いいモン持ってくるから。」

しばらくして、黒子は大きな箱を持ってきた。

「ガーク——！！」

と、黒子が呼ぶと、ガクはくるっと振り向いた。その瞬間、ガクの顔に黒子が投げた柔らかいボールが当たった。

「あ。ごめん！顔に当てるつもりはなかったんだけど、えっと、その、」

そう言いつつ黒子はガクに寄った。すると、「ボン」と黒子の顔にボールが当たった。

「しかえし。」

ガクはにこつ、と意地悪そうに笑った。

「てめ、やったな？ 覚悟しろよ。」

そう言って、黒子は箱の中にある大量のボールをガクに向けて転がした。

すぐに、ボール合戦は始まった。Yasudaの部屋で。

「おりゃっ」

「当たれっ」

ボールが当たったり、当たらなかったり。そんな時、ドアが開いた。

「電話終わりました、よゝ！？」

ガクの放ったボールは、丁度タイミングよく帰ってきたYasudaの鼻にクリーンヒットした。

「人の部屋で何やってんですか！！あなたたちっ」

そう言って、Yasudaは黒子に向かってボールを投げた。

「今のは俺じゃねえよっ」

そこからまた、Yasudaも加わってボールでしばらく合戦していた。

「あ、ちょっとストップ！！外、見てみ！」

いきなりの黒子のストップに、不服そうにした

——1番そんな顔をしていたのはYasudaだったことはまあ置いておいて——

2人は、一瞬なんだよ、という顔をしてから窓の向こうを見た。すると、雪が降っていた。

「きれい。」

ガクはすっかり見入っていた。

「外で雪合戦するか。」

「負けない。」

「いや俺が勝つ!!」

黒子がガキ相手に本気である事に呆れつつ、今年の雪は早いな。そう感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5915d/>

クリスマスの夜の1ヶ月前の奇跡

2010年10月11日00時52分発行